全米黒人女性協会と創設者達

―メアリ・C・テレルを中心に―

岩本裕子

一．はじめに

「力を持つこと（empowerment）という概念は黒人女性にとって決して新しいことではない。ほぼ一世紀前にすでに私達は経済的、かつ政治的な力を自ら持つために組織を作った先例があるのだ」と、政治活動家で黒人女性史家であるアンジェラ・デービス（Angela Davis）は、黒人女子大学スペルマン・カレッジ（Spellman College）で開かれた女性学会の一九八七年年次大会での講演を始めた。現在の黒人女性の雇用問題や、生活の改善を計るために共に力をつけ、皆で一致団結して向上することを説いている。さらに、現在の合衆国が一九世紀末に類似しているとして、自分達の状況改善には仲間の結束が必要であることを主張する。[1]

デービスが講演で引用した「共に向上しよう」（"lift as we climb"）の言葉は、一八九六年に設立された全米黒人女性協会（The National Association of Colored Women:NACW）のモットーである。黒人女性史にとって一つの分水嶺という解釈もある[2]この組織設立の過程を、その創設者達の言動を通して検討することが本稿の目的である。一九世紀末にあって彼女達に全国組織を創設する「力を持つこと」をさせた原動力は何だったのか、そのことで何を主張し、何を獲得しようとしたのかなどを検討することで、一九世紀末の黒人女性史に占めるこの全国組織の意義を検討してみたい。[3]

創設者達の中でも、特にメアリ・C・テレル（Mary Church Terrell:1863-1954）[4]を中心に検討する。テレルは一八九六年に初代会長に選出されて一九〇一年まで二期会

長を勤めた後、名誉会長として生涯のほとんどをこの協会の活動と共に過ごした黒人女性である。彼女個人の人生や主張を検討することは、二〇世紀転換期における全米黒人女性協会の位置づけの試みにも通じるであろうと思うからである。

註

(1) Angela Yvonne Davis, *Women, Culture, & Politics*, (New York, Random House, 1989), pp. 3, 5, 10-11.; "empowerment" をめぐる議論は次の中で展開されている。Patricia Hill Collins, Black Feminist Thought: Knowledge, Consciousness, and the Politics of Empowerment, (New York, Routledge, 1991).

(2) Paula Giddings, *When and Where I Enter: The Impact of Black Women on Race and Sex in America* (New York: William Morrow, 1984), p.95.

(3) 全米黒人女性協会に関する研究は、合衆国ではすでに二〇世紀前半から、協会の活動をまとめる目的で進んでいた。年代順の研究は以下である。
Elizabeth L. Davis, *Lifting As They Climb: The National Association of Colored Women* (Chicago: Race Relations Press, 1933); Ruby M. Kendrick, "'They Also Serve': The NACW Inc.", *The Negro-History Bulletin*, vol. XVII (March, 1954), 171-175., included in A CARLSON - PUBLISHING SERIES, VOL. 7 pp.817-824; The NACW Clubs Inc., *What You Should Know About It*, 1959; Tullia Kay Brown Hamilton, "The National Association of Colored Women, 1896-1920", (Ph. D. dissertation, Emory University, 1978); Beverly W. Jones, "Mary Church Terrell and the National Association of Colored Women, 1896 to 1901" *Journal of Negro History*, LXVII, No.1' (Spring, 1982), pp.20-33; Charles Harris Wesley, *The History of the National Association of Colored Women's Clubs, Inc.: A Legacy of Service*, (Washington D.C.: National Association of Colored, Women's Clubs, Inc., 1984); 拙稿 "LIFTING AS WE CLIMB: Goals and Activities of the NACW Club (1896-1992)" 浦和短期大学紀要『浦和論叢』第九号、一九九二年九月 六三―八五頁。

(4) テレルに関する一次史料は、Ⅲ章の註(∞)で引用する自伝を初めとして、膨大な量が入手可能である。メアリ・テレル文書 (Mary Church Terrell's Papers) となって、ワシントンD.C.にある国会図書館の手書き文書部門及びハワード大学のモーランド・スピンガーン・リサーチセンターに、講演原稿の下書きや年次大会への招待状、新聞の切抜きなど細かい史料までがそのままマイクロフィルムとして所蔵されている。こうした一次史料を用いた研究も進み、二次史料も豊富である。主なものを年代順に列挙しておく。
Benjamin Brawley, *Women of Achievement*, chapter

えた南部黒人達に対する白人からの固定観念（ステレオタイプ）は、容易に変わるものではなかった。特に黒人女性に対しては、性的に不道徳で、害をもたらす存在であり、下等で動物的であるという「悪い黒人女性の神話」が定着していた。奴隷制時代以来、南部白人から何世紀もの間、「無知で野蛮で不道徳である」という固定観念（ステレオタイプ）で見られてきた黒人女性は、一九世紀末を迎えても、「徳のある黒人女性がいることなど考えられない」などと、雑誌の論説に書かれるような状況であった。[1]

いくらか好意的な見解もあるが、黒人女性の悪印象打破が目的ではなく、不道徳であることを前提にしてその理由を説明したようなものがあった。黒人の福祉事業に資金を提供しているボルティモア（Baltimore, Md.）のスレイター基金（Slater Fund）が、一八九六年に出した南部の黒人女性に関する報告書には、次のように書かれている。

南部の黒人女性は誘惑を受けやすい。北部の白人女性はその事実を知らないが、奴隷制時代から変わらず続いている。彼女達は暗黙の了解の内に南部の白人男性の犠牲になっている。南部の白人女性からは同情も受けず、助けられることもない。誘惑に遭った黒人女性は、一間の奴隷小屋で生涯を過ごした時代から受け継いだ道徳観で抵抗するしか方法はなかった。[2]

VI Mary Church Terrell (Woman's American Baptist Home Mission Society, 1919); Gladys Byram Sheppard, *Mary Church Terrell: Respectable Person*, (Baltimore: Human Relation Press, 1959); Dorothy Sterling & Benjamin Quarles, *Lift Every Voice*, chapter 3 Capital Lady, (Garden City, Zenith Books, 1965); Frances A. Desselle, "The Life And Contributions of Mary Church Terrell" Master's Thesis, Howard University, 1974, 187p; Paul Cooke, *Mary Church Terrell: A Tribute*, (Washington D.C., 1978); Beverly W. Jones, "Mary Church Terrell and the National Association of Colored Women, 1896 to 1901" *Journal of Negro History*, LXVII, No.1, (Spring, 1982), pp. 20-33; Dorothy Stering, *Black Foremothers: Three Lives*, 2nd ed. (New York: the Feminist Press, 1988); Beverly W. Jones, *Quest for Equality: The Life and Writings of Mary Eliza Church Terrell, 1863-1954*, (*Brooklyn, N.Y.: Carlson Publishing Inc., 1990*) *A CARLSON PUBLISHING SERIES, VOL.13.*

二、一九世紀末の黒人女性

(1) 黒人女性の社会的・経済的状況

奴隷解放後、再建期を経ていわゆる「どん底時代」を迎

自由黒人として北部に生まれ、教育を受けたファニー・B・ウィリアムズ（Fannie Barrier Williams:1855-1944）は、一八七〇年代に教師として南部に赴任し、南部の黒人女性達の現状を目の当たりにして衝撃を受ける。「誤解され、道徳的に欠陥があると悪評され、しばしば憎まれてさえいる」現実を知り、彼女はショックから「容易に立ち直れなかった」と語っている。[3] 同じ黒人女性でも、南部と北部でこれほど状況の相違があったのだ。しかしウィリアムズのように直接屈辱的な差別を受けることも少なく、知的にも経済的にも豊かであった黒人女性の存在の方が、むしろアメリカ社会では知られていなかったかも知れない。

悪印象の定着していた南部社会とは対象的に北部では、一八八〇年代になって黒人女性の大学進学率の上昇、さらに弁護士、医師、牧師、教師などの専門職への進出などによる経済的地位の向上が、進み始めていた。[4] 黒人女性の所有する不動産の合計額は七億ドルにまでなり、仲間で千四百万ドルもの資金を集めて、黒人児童の教育及び教員養成にあてていた。[5] しかしこのような黒人女性の存在は、ほとんど知られる機会もないままに、一九世紀末には「悪い黒人女性の神話」が定着していたのだった。

（2）萌芽期の黒人女性組織

社会的、経済的に安定し始めた黒人女性達の関心は、自らの更なる向上も当然であったが、地域に住む多くの黒人女性仲間の向上にあった。一九世紀後半には、合衆国で急速に進む都市化、工業化の影響を受けて、貧困の中で苦しむ黒人女性達の生活救済、さらに彼女達の子供達の福祉、教育などに対して、活動が始まっていた。

シカゴにハル・ハウス（Hull House）を設立しセツルメント活動をした白人女性ジェイン・アダムス（Jane Addams）は有名だが、一八九〇年以降シカゴを含む全米各都市で、黒人女性による組織活動も始まっていた。南部諸州で黒人男性の選挙権剥奪が公然と行われた一方で、全国的な女性参政権獲得運動が本格化していたこの時期に、黒人女性組織は、全米各地に散在し、地域社会に根をおろした活動をしていた。

全米各地に百を越えて存在した小さな黒人女性組織の中で、代表的なものを設立年代順に挙げてみよう。ハーパー女性クラブ（The Harper Woman's Club of Jefferson City:1890）、ワシントン女性クラブ（The Washington Women's Club:1890）、女性ロイヤル連盟（The Women's Loyal Union of Brooklyn and NY:1892）、女性の時代クラブ（The Woman's Era Club of Boston:1892）、ア

イダ・B・ウェルズクラブ（The Ida B. Wells Club of Chicago:1893）、フィリス・ホイットリークラブ（The Phillis Wheatley Club:1894）[6]、ソジャナクラブ（The Sojourner Club of Providence:1894）女性進歩クラブ（The Woman's Improvement Club of Knoxville:1894）、タスキーギ女性クラブ（The Tuskegee Women's Club:1895）などである。

これらの組織の活動目的は地域によって様々だが、黒人女性の状況改善であることは共通していた。その事例としては、手に職をつけ仕事に就けるための裁縫教室や家事講習会の開催、禁酒運動、さらに働く母親を待つ子供達のための保育園や幼稚園の建設、あるいはすでに存在する幼稚園への資金援助などであった。生活の向上への取り組みのみならず、知的向上によって当時の悪印象打破につなげるため、仕事を終了した夜間に文学や外国語を教える私設学校を開設した組織もあった。[7]

組織活動の中では萌芽期にあたる一八八〇年代から九〇年代にかけて、組織の規模を大きくすることよりも、各々の活動を充実させることの方が急務であったと言える。白人女性達が、禁酒運動や選挙権獲得運動などの目的のもとに次々と組織を大きくし、全米規模にまで拡大していたこの時期に、黒人女性組織はまだ大きな統合の動きを見せてはいなかった。

（3）「ジャックスからの手紙」とシカゴ万博（一八九三）

再建終了後の南部黒人が直面した現実の中で、政治的に二級市民に転落すること、「ジムクロー法」によって社会的に黒人差別が定着すること以上に問題であったのは、命の危険に晒されることであっただろう。すなわち、一八八〇年代から九〇年代にかけてピークに達し、一八九二年に最高件数を示した黒人リンチ事件であった。南部の白人女性が強姦されたという噂だけで十分で、噂の対象となった黒人男性は、KKKのように夜の闇と白い頭巾に隠れて行われるのではなく、白昼堂々と南部白人の老若男女に取り囲まれ、リンチにあった。中には小学校を休校にして教師の引率のもと子供達が、木に吊された「奇妙な果実」を見学に来るようなテキサス州の例もあった。犠牲者は濡れ衣であることが多く、ここにもう一つの神話、「強姦神話」が成立していた。

この強姦神話打破のために立ち上がった黒人女性がいた。反リンチ運動家アイダ・B・ウェルズ（Ida B. Wells:1862-1931）[8]は、自らの命を危険に晒しながら、黒人の人間としての尊厳獲得にその生涯を捧げた女性である。彼女の運動はペンによる告発と、講演による呼びかけだった。南部

から北部へ、さらに英国へと活動し、一八九二年の英国では大きな反響を得ることができた。黒人リンチを行う南部白人に対して悪印象を持つであろう英国反リンチ協会（The Anti-Lynching Society of England）宛てに、ミズーリ新聞協会会長のジェイムズ・ジャックス（James W. Jacks）は、ウェルズの言動を批判する目的で「アメリカ黒人は完全に道徳性に欠け、特に女性は売春婦であり、みんな生来泥棒で嘘つきである[9]」という投書をしている。

「ジャックスからの手紙」が出された理由は、ウェルズが訪英中に反リンチ運動の講演をする際に、英国で評価の高かった合衆国の福音宣教師ムーディー牧師（Rev. Dwight Moody）やキリスト教女性禁酒同盟（Women's Christian Temperance Union:WCTU）会長の、白人女性ウィラード（Frances Willard）を個人攻撃したためであった。彼らが、キリスト教に基づいて伝道や活動をしながらも、根本的には南部での黒人差別を認め、リンチ暴徒の行為さえも容認するような発言をしていることを、ウェルズは公に非難したのだった[10]。投書を最初に手にしたのが人種差別反対派の協会秘書であったことは幸いであった。秘書は掲載前に『女性の時代』誌（*The Woman's Era*）[11]の編集者のジョゼフィーヌ・ラフィン（Josephine St. Pierre Ruffin:1842-1924）のもとにコピーを送り、ラフィンの掲載拒否の支持を受け入れたために、公になることはなかった[12]。「ジャックスからの手紙」を単なるウェルズ非難と受け取らず、黒人女性全体への屈辱的な発言と見なし、誤った評価を是正して自らの本当の姿を全米に知らせる必要があることを痛感したラフィンは、全国組織設立という目的に向かって行動を開始した。

同時期に黒人女性をやはり全国組織設立へと駆り立てる出来事が起こった。「コロンブス到着四百年」を記念して一年遅れの一八九三年に開催されたシカゴ万博（The World's Columbian Exposition）において、黒人女性は黒人としてはもとより、女性としても参加を拒否されたのだ。唯一の道と思われた女性館（The Women's Building）への参加を拒否された理由は、「個人単位ではなく団体単位で構成しているために、全米組織がない黒人女性は参加不可能である」ということだった[13]。時期を同じくして、黒人女性は団結することを、外的に強いられ、内的にも機が熟していたことも加わって、急速に全国組織設立へと動き始めるのであった。

註

(1) Gerda Lerner, ed., *Black Women in White America: A Documentary History,* (New York, Pantheon Books, 1972), pp.163-164.; Eleanor Tay-leur, "The Negro Woman: Social and Moral Decadence", *The Independent,* Sep.18, 1902, 71.

(2) Mrs. E. C. Hobson and Mrs. C. E. Hopkins, *Report Concerning the Colored Women of the South,*(Slater Fund, Baltimore, 1896), pp.6-7. quoted in Eleanor Flexner, *Century of Struggle: The Woman's Rights Movement in the United States* (Cambridge, Mass., and London: Belknap Press, Harvard University Press, 1959, 1980), p.191.

(3) F. B. Williams, "A Northern Negro's Autobiography", *The Independent,* July 14, 1904, 91-92.

(4) Giddings, *op. cit.*, pp.75-76.; Elsie J. McDougald, "The Double Task:The Struggle of Negro Women for Sex and Race Emancipation," *Survey Graphic,* vol.6, no.6 (March 1925), 691.

(5) Addie Hunton, "Negro Womanhood Defended," *The Voice of the Negro* (July 1904) 282.

(6) フィリス・ホイットリー (Phillis Wheatley:1753-1784) は、合衆国で最初の黒人女性詩人である。西アフリカのセネガルから奴隷として連れてこられて、一四才で初めて読み書きを覚え最初の詩を詠んで以来、彼女の詩は多くの人々に愛された。一九世紀に生きた黒人女性達は、彼女に敬意を表して組織名に好んでフィリスの名前をつけた。一八九四年のこの組織は、ニューオリンズだが、他にも彼女の名前をつけた組織が、シカゴ、フロリダ州、ニューメキシコ州、クリーヴランド、デトロイトなど各地で設立されている。同様に次のクラブにつけられたソジャナ・トルース (Sojourner Truth: 1797-1883) も、合衆国の女性史に人種を越えて名を残したフェミニストの草分け的存在である。彼女の名をつけたクラブも全米各地に見られる。

(7) Davis, *op.cit.*, pp.11-13.; Gerda Lerner, "Early Community Work of Black Club Women", *Journal of Negro History,* LIX,No.2, (April, 1974),161-162.; Wesley, *The History,* pp.25-26.;前掲拙稿、六四―六五頁。

(8) 詳細は、拙稿「反リンチ運動家アイダ・B・ウェルズ」立教大学史学会『史苑』第五一巻第一号、九一年一月、二四―四三頁を参照されたい。

(9) Lerner, *Black Women,* p.436.; 前掲拙稿、三七頁。

(10) Ida B. Wells, *Crusade for Justice: The Autobiography of Ida B.*Wells, edited by Alfred M. Duster, (Chicago, University of Chicago Press, 1970), pp. 111-113.

(11) ジョゼフィーヌ・ラフィンと一人娘フロリダ (Florida R. Ridley) によって一八九二年に設立されたボストンの「女性の時代クラブ」の機関誌である。合衆国で黒人女性によって出版された最初の月刊新聞とされている。ラフィン編集長

を始めヴィクトリア・マシュー、ファニー・ウィリアムズ、メアリ・テレルなど黒人女性組織の主要な指導者達を編集補佐としている点でも、単なる新聞ではなく、黒人女性の運動誌とも評価できる。英国反リンチ協会の秘書が「ジャックスからの手紙」を『女性の時代』誌へ最初に送り、善後策を計ったことからも当時の評価を確認できる。

(12) Dorothy Salem, *To Better Our World: Black Women in Organaized Reform, 1890-1920*, (Brooklyn, N.Y.:Carlson Publishing Inc., 1990.), pp.20-21. A CARLSON PUBLISHING SERIES, VOL.14.

(13) 詳細は、拙稿「シカゴ万博（一八九三）と黒人女性－アイダ・B・ウェルズとファニー・B・ウィリアムズの場合－」駒沢史学会『駒沢史学』第四五号、九三年　四月、一四三－一六六頁を参照されたい。

三．全国組織設立への動き

(1) 黒人女性連盟(CWL)と全国黒人女性連合(NFAAW)

百を越える地域レベルの組織の中には、すでに小さいものを合併し統合へ動き始めたものもあった。その一つはメアリ・C・テレルが設立したワシントン女性クラブが中心となって一八九二年に結成した黒人女性連盟（the Colored Woman's League of Washington D.C.:CWL）であった。地域における個人的な成長と全体での前進を目的として、黒人女性の状況改善のために積極的に活動をした。各クラブの代表者の中から、初代会長にはワシントンD.C.の旧家出身のヘレン・クック（Helen A. Cook）が選出された。[1]

CWLの地域での活動は、幼稚園の保母養成所の設立、七つの無料の幼稚園と数カ所の保育園の設立とその維持であった。彼女達の先駆的努力と事業の成功は、地域や州の公共団体によって引き継がれ、幼稚園、孤児院、養老院などの建設に向けられていった。ワシントンD.C.では、公立幼稚園の制度が確立し、その保母にはCWLで訓練を受けた卒業生が採用された。[2] 働く女性のために生活の向上を目指し、さらに文学や外国語を学ぶ夜間学校の開設で、知的向上を目標ともした。CWLの社会的貢献の成功は、他のクラブの指導者達に大きな指針とも励ましともなったのである。

早期に統合したもう一つの組織には、全国黒人女性連合（The National Federation of Afro-American Women; NFAAW）が挙げられる。「ジャックスからの手紙」を契機に決意したラフィンが自らの組織「女性の時代クラブ」を母胎として、一八九五年に南部を含む全米十二州に散在した三六の黒人女性クラブを統合した。初代会長には南部

黒人に自助を説き職業教育をしてきた黒人男性指導者ブッカー・T・ワシントン（Booker T. Washington:1856-1915）の三番目の妻、マーガレット・ワシントン（Margaret Murray Washington:1865-1925）が選出された。マーガレットは夫の設立した職業訓練学校タスキーギ校（Tuskegee Institute）で「女校長」（"Lady Principal"）として教育に携わりながら、タスキーギ女性クラブを結成し、黒人女性の知的向上に貢献していた。[3] NFAAWの結成で目的を達成したとは考えないラフィンは、次の行動に移っていた。

このように性質的にも規模的にも似通った二つの黒人女性統合組織が同時期に設立された。シカゴ万博の女性館への参加には間に合わなかったが、全国規模の組織を作ることの必要性は依然増していた。ラフィンはこれを次の目標として呼びかけ（"A Call"）に入った。

（2）全米黒人女性協会（NACW）設立前夜

「共に話し合いましょう」（"Let Us Confer Together"）と題された呼びかけで、一八九五年七月末にボストンで開かれたNFAAWの結成式で、ラフィンは黒人女性が国内でどの様に低く評価されているかを説明した。参加クラブには、予め「ジャックスからの手紙」のコピーが送られてあったが、再びそのことに触れ、自分達黒人女性への心無い中傷に負けず、悪印象打破のために何よりも全体の団結が必要であることを力説した。[4] ここで話し合うことが必要な理由として、指導者同志が互いに勇気づけ情報交換をして活動を高めること、子供達の教育に貢献しなければならないことを挙げた。さらに、クラブに所属する自分達に限定せず、自己犠牲を強いられている何千という黒人女性達、南部の片隅で学ぶことからも祈ることからも離れた暮らしをしている多くの母達や少女達の生活を高めることを大きな目的に掲げた。

ラフィンは、自らの運動の射程を単に黒人女性に限定しなかった。「我々女性の運動は女性主導による女性のための運動だが、女性に限らず、男性も含めた全ての人類のための運動である」ことを熱弁した。しかも一地域の一部の運動を越えたものであることも強調した。これまで、白人組織からは、女性であることで別扱いされ、白人女性組織からは、黒人であることで排除されてきた経過を踏まえて、「我々は、疎外されたり引き下がったりはしないで、前線で活動をする。同じ目的を持ち共に前進する人ならば（人種差別をしないで）誰でも、歓迎し受け入れるつもりだ」[5] とも付け加えた。

翌年一八九六年七月に一週間違いで、CWLとNFAA

Wは共にワシントンD.C.で年次大会を開催した。互いの組織から代表者を交換して参加させることにもなっていた。両団体ともに、豊富なテーマで多くのセッションが企画された。演題例としては「教育者としての女性」「女性の高等教育」「幼稚園事業の道徳的、知的慈善」「幼稚園は子供のために何ができるか」「看護婦としての女性」「ジャーナリズム界の女性」「実業界の女性」「人間対黒人問題」のように、黒人女性の現状を正しく認識する様な内容が選ばれていた。

両団体から七人ずつの代表者を出して合同委員会が構成された。互いに理解し合えるまで話し合い、相違点については調和するよう努力し、全国組織設立を前提に議論された。[6] 議論の末、全米黒人女性協会と名付けられることになる最初の全国組織結成が決定した。

（3）創設者達と初代会長選出

一八九六年創設時点で協会を構成したのは、全国合計二五州とワシントンD.C.、並びに二つの准州（ニューメキシコ准州とオクラホマ准州）からの団体であった。全米五十都市に及び、クラブ数では八十二団体になった。参加代表者数は七三人で、登録会員は五千人にもなった。[7] 組織運営は、すべて合同委員会に一任されたが、委員の間の話し合いは簡単には進まなかった。各々の委員が地域において指導的役割を果たし、誇りを持って仕事をこなしてきた人々であるために起こる初歩的なぶつかり合いもあった。一例を挙げてみる。「どの組織が全米で最初に設立されたか」に関して、CWLの活動について公にされた最初の記事が一八九三年に存在していた。にも拘らず一八九五年設立のNFAAWから、自らが最初の統合体であると主張されたためにCWLから異議申し立てが出されるという具合であった。[8] 全国組織設立が決定している事実を考えると、すでに議論の必要もないことのようだが、当時の彼女達にとっては大問題であったのかも知れない。

このように小さい問題は山積していた。例えばこの組織の名前を何と名付けるかということでさえ決して容易には決まらなかった。そして何より最も難しい問題は、初代会長を誰にするかという問題であった。合同委員会を構成した委員はCWLとNFAAWから各々七人ずつ選ばれた。会長選挙が始まっても、対立候補二人に対して共に出身組織の候補者に投票するために七票ずつ同票のままで、何度候補者を替えても同じ現象の投票を繰り返す悪循環であった。

最後に投票者間で、出身組織によらない平等な立場、換言すれば妥協による最終投票が行われた。夕方六時を過ぎ、

年次大会セッションのほとんどが終了するような時刻に、メアリ・テレルが多数票を獲得し、初代会長として選出された。初代会長に選ばれたことを大変光栄に受け止めつつ、テレルは「この合同委員会で経験した複雑な感情を決して忘れることはないであろう。これまで経験した中で最も苦しい仕事であった」[9]と述懐している。この初代会長選出に見られるように、全米八十二のクラブの統合体の処女航海は、決して順風満帆とはいかなかった。こうした中で、互いに妥協しながら、黒人女性の向上を目標に動きだした大型客船の船長とも言うべき初代会長メアリ・テレルに焦点を当てて、次章ではごく初期の活動を検討したい。

註

(1) Wesley, *The History*, p.25.
(2) Lerner, "Early Community Work", p.162.
(3) Davis, *op.cit.*, pp.20-21.; Wesley, *The History*, pp. 21-23.; NFA－AWに関しては次を参照。Wilson Jeremiah Moses, *The Golden Age of Black Nationalism, 1850-1925*, (New York, Oxford University Press, 1978) pp.103-131 (Chapter 5. Black Bourgeois Feminism versus Peasant Values:Origins and Purposes of the National Federation of Afro-American Women)
(4) Davis, *Ibid.*, pp.14-15.; Wesley, *The History*, pp.29-30.
(5) Davis, *Ibid.*, pp.17-19.
(6) Wesley, *The History*, pp.36,38.
(7) Davis, *op.cit.*, pp.11-13.
(8) Mary C. Terrell, "What the Colored Women's League Will Do", *Afro-American Journal of Fashion*, vol.11, no.7. (May & June 1893), 73. quoted in Mary Church Terrell, *A Colored Woman in a White World*, (Washington D.C.: NACW Inc.,1968), p.149.
(9) Terrell, *A Colored Woman*, pp.151-152.; Wesley, *The History*, p.39.

四. メアリ・C・テレルと全米黒人女性協会

(1) 生い立ち－百万長者の娘として

メアリ・エリザ・チャーチ (Mary Eliza Church) は、奴隷解放宣言の出された一八六三年の九月二三日に南部メンフィス (Memphis, Tenn.) で生まれた。かつて奴隷であった父ロバート (Robert Reed Church) と母ルイザ (Louisa) の間に生まれた第一子であり、唯一の女児であった。小さい頃から「モリー」と呼ばれ可愛がられた。家内

奴隷であった母は、解放された後、美容院を開き財産を作った。一八六〇年代後半に父ロバートと離婚し子供達を連れて南部を去り、最終的にはニューヨークに落ち着き三十年以上も美容院の経営で成功した。

父ロバートは、生涯で一日も学校へ通うことはなかったが、独学で読み書きを覚えた努力家だった。モリーが知る限りでは「最も勇気のある男性」であった。「アイルランド人の暴動」と通称される一八六六年のメンフィスでの騒動の折に、父は重傷を負いながらも奇跡的に回復した。また一八七八年のミシシッピ地域に黄熱病の嵐が吹き荒れた時には、復興を信じて、メンフィスを離れる人々から土地を買い続け、その判断が的確で大儲けをして、南部黒人で初めての百万長者となった。[1]

当時の南部黒人の中では例外的に豊かな暮らしをして、経済的には何不自由なかったモリーは、両親の配慮のもと黒人差別を実感することの少ない生活をしていた。母親は、モリーに「淑女」として振舞うことを強いた。離婚が普通に受け入れられなかった当時、両親の離婚を経験し父親とは離れて弟と共に母親とメンフィス市内に住んだが、モリーが就学年齢に達した一八七〇年に、黒人差別のない北部オハイオ州へ母子で移住した。さらに十二才になると同時に同じ州内のオーバリン（Oberlin, Ohio）へ移り高校を卒業後、オーバリン大学へ進学した。同大学は、奴隷解放論者によって一八三五年に設立された大学で、人種ばかりか性でも差別をしないで学生を受け入れていた。

大学入学前に専攻を決定する際に、多くの女子学生が、二年早く卒業できるいわゆる「淑女コース」（"ladies' course"）を選択するのを見ながら、彼女は「紳士コース」（"gentlemen's course"）と呼ばれる古典専攻を選択しようとした。文学士の称号を目的に主に男子学生が選択するコースで、ギリシャ語やラテン語が必修であった。「婚期を逃すという友人からの忠告は気になったけれども、私は勉強をすることが好きだから父に頼んだ」と述懐している。父は娘の希望を快諾して、すぐに授業料を払った。[2] オーバリン大学で、人種や性にこだわらない平等な教育を受け、一八八四年に卒業した。モリーはその年の卒業生の中で文学士を授与した三人の黒人女性の一人となった。

大学卒業後、娘が仕事を持つことを認めない父親によってメンフィスに連れ戻された。「この三百年間南部では真の淑女であれば仕事を持たないものだ」と信じる父は、娘に淑女としての生活を強制した。しかし父の再婚が契機で八五年にはオハイオに戻り、ウィルバフォース大学（Wilberforce Univ.）で教壇に立つことができた。さらに黒人高校でラテン語を教えるという話を受けて、モリーは

一八八七年にワシントンD.C.へと職場を異動する。[3] 彼女の人生を大きく決定づけ、後半生を送ることになる首都への出発であった。

(2) ワシントンD.C.での活動

職業を持つという娘の強い意志に妥協した父は、八八年から数年間ヨーロッパへ留学することを勧め、資金援助を提案した。ドイツを中心に西ヨーロッパを回ることを決め、仏語、独語、伊語とこれまでのモリーの知識にさらに磨きをかけることになった。何よりも、合衆国にある人種差別を経験しないヨーロッパに魅力を感じ、人種の障害のない異国で生涯を送りたいとさえ思ったこともあった。滞在中に、ドイツの男爵から求婚されたり、八九年のパリ万博で巡り合ったアフリカの王子に心を引かれたり、ロマンスの香りを残しながらモリーは帰国を決意する。

ヨーロッパでは黒人であるために出自をアフリカと見られることが多かったが、そのたびに彼女は自らに問いかけ、自らが合衆国の黒人であることを確信するのだった。ドイツで星条旗を見た時の感激と愛国心の確認を自伝で繰り返している。帰国すれば再び人種差別との闘いが始まることは明らかだが、当時の合衆国の黒人女性ばかりか白人女性の誰よりも、高い教育を受けた自分であればこそ「自分自身の人種の向上のために貢献したい」との強い決心をしての帰国であった。[4]

再びワシントンD.C.の黒人高校の教師の職に復帰し、ラテン語に加えてドイツ語を教えることになった。オーバリン大学時代から女子学生が学ぶ言語ではないと見なされたラテン語とギリシャ語に関する話題を中心に会話ができる男性、ロバート・テレル (Robert Heberton Terrell: 1857-1927) は職場の先輩であった。一八九一年の彼との結婚は自然の成行きと言えた。結婚によってモリーは、旧姓を残してメアリ・チャーチ・テレル (Mary Church Terrell;以後テレルと呼ぶ) と名乗った。夫婦で同じ職場で働くことが認められず退職を余儀なくされ、新たな道を探すことになる。

ここで母親としてのテレルの経験に触れておこう。テレル夫婦には一八九八年に娘フィリス (Phyllis;黒人女性詩人の名にちなむ) が生まれる。さらに一九〇八年に弟の娘でフィリスより四才年上のメアリ (Mary) を養女に迎える。テレルはフィリスの前に三人の子供を亡くしているが、黒人専用病院の設備の悪さが原因と考え、ワシントンD.C.ではなく母のいるニューヨークでフィリスを出産している。[5] この世に生を受けなかった子供達を妊娠している間

に、テレルは人生の大きな壁をいくつか越えている。一八九二年にメンフィスで幼なじみのトム・モス（Tom Moss）がリンチに遭い死亡したニュースを聞いた時も[6]、すでに述べた一八九六年の初代会長選出の時もテレルは妊娠していたが、いずれも出産後数日の内には新生児を亡くしている。

彼女のこの個人的な体験は、後の彼女の活動の方向付けの重要な要素となる。既婚の黒人女性を国の重要な労働力とすること、黒人女性を経済的に自立した女性として社会に位置づけることを再優先事項として活動を続けていく彼女にとって、黒人女性が安心して働ける条件を整えることが必要であった。つまり、残された子供たちの面倒を見る幼稚園や保育園の充実であった。さらにその働く母親たちの知的向上も同時に目標とした[7]。このことはすでにCWLの活動のところで述べた通りである。

他方、失職してからのテレルはワシントンD.C.ですでに進んでいた白人女性組織の運動に興味を示すようになった。当時の白人女性の運動の焦点は女性参政権であった。その指導的役割をしていた全米女性参政権協会（National American Woman Suffrage Association: NAWSA）の年次大会で「社会の不正への抵抗」というテーマのセッションに出席したテレルは、「黒人女性として私は、黒人達が犠牲になっている現実の不正に対してこの協会も立ち上がってほしいと希望します」と発言した。女性参政権運動家のスーザン・アンソニー（Susan B. Anthony）から「あなたは協会の会員ですか」と問われ、テレルは「いいえ違います。しかしあなたがたは部外者の声に耳を傾けることも必要だと思います」と答えた[8]。このことがきっかけでアンソニーとは友人となる。

白人女性組織への入会は黒人女性は拒否され、黒人の問題は自らが解決するために運動するしかないことを学んだテレルは、ワシントンD.C.に多く存在する黒人女性の知識人達に呼びかけて、組織作りを始めるのであった。一八九〇年にワシントン女性クラブを結成し、さらに幾つものクラブを統合して九二年に黒人女性連盟（CWL）としたことはすでに述べた。また九五年にはワシントンD.C.の教育委員会では最初の黒人女性委員に選ばれている。地域における教育と女性運動との最前線で活動を始め、黒人女性として二重の抑圧に立ち向かうための指導者としての資質を十分兼ね備え始めていた。NACW創設時点でテレルは弱冠三三才であった。

(3) 第一回全国大会と初代会長就任演説

一八九六年七月に全国組織となった全米黒人女性協会のことを、全米の人々（性も人種も問わず）に知らせる必要

があった。ラフィンの組織の機関誌『女性の時代』誌への投稿による報告の方法を取った。黒人の問題と言うよりは、女性の問題に焦点を当てた同誌の宣伝効果は大きかったと言えよう。同誌は、正式な協会機関誌ができるまで機関誌の役割を果たすことになる。一八九六年八月号に「我々黒人女性は、わが国の黒人の福祉の促進、成長と向上のために団結し活動するため、全米黒人女性協会を設立した。個人としてはすでに教育や教養面でかなりの成就を見ているが、全体で大きく前進し、進歩と改革を目標に組織で活動をする」との報告がなされる。テレル初代会長名で出されたこの記事は「人間というものは、恐れを抱きつつ、未来に望みをつなぎながら、静かに自分達の運命に任せるものだ」[9]と結ばれている。

第一回全国大会は一八九七年九月十五日から十七日までの三日間、南部ナッシュヴィル（Nashville, Tenn.）で開催されることに決定した。四月二六日付けで、全米の各支部宛てに開催期間と開催地が報告され、この大会の内容について希望がある場合は早い時期に実行本部委員会（the National Executive Board）に知らせるようにとの通達が出される。大会の内容についてはテレル会長を始め七人の副会長、執行部各部長、大会企画長、実行委員会議長など、協会役員達の手で入念に準備され、議事草案（Minutes）となって出来上がった。午前、午後、夜と一日を三セッションに分け、各支部の担当役割もバランス良く配置され、まさに用意周到のプログラムとなった。[10]

第一回大会に特徴的な企画は、協会規約（Constitution）の決定であった。議事草案の中に記録され、大会一日目午後のセッションで提案、二日目午前のセッションで協議、三日目午前のセッションで採択が各々予定されていた。採択された協会規約は、前文と全六条で構成されている。前文には「合衆国の黒人女性である我々は、黒人の道徳的、精神的、物質的進歩のために団結する必要を感じそのために組織で努力していく」と唱っている。第一条では組織名を明示し、第二条では組織の目的について「黒人女性及び少女の教育を促進し、家庭の水準を上げ、女性や子供の福祉のために働く。働く女性の権利を守り、人間的に向上できる機会を多くする。人種を越えて全ての人々に公正と善を広める」と全七節に渡って列挙している。[11]全国組織がないと言われて急遽設立した組織ではあったが、創設者達にはこの時点ですでに大きな展望があったことがこれらの条項から確認できる。

第一日目の夜のセッションで多くの来賓からの祝辞を受けて、いよいよテレルの初代会長就任演説が始まった。「団結すれば力を得ることは、古今東西の歴史でも自明の

理です」という言葉で始まった演説[12]で、彼女は全米の黒人女性が団結することを讃えている。さらに協会規約にもあるように、テレルは家庭の重要性を説き「働く女性として家庭をより良きものにしていくことこそ大切である」と繰り返す。この主張をテレル研究者であるジョーンズ(Beverly W. Jones)は「最も保守的でこの主張ではフェミニストとしては成功しない」と批判している[13]。しかし、家庭の重要性を説くことで女性が職業人である前に家庭人であれとテレルが主張しているわけではないと思う。単にフェミニストの枠で規定できないところに、一九世紀末を生きた黒人女性の複雑な立場があるのだ。

テレルの主張は家庭の向上から子供達の教育に発展する。CWLの主な活動であった幼稚園の充実と経済的補助、保育園の設立を力説し、都市部に住む黒人女性達の暮らしぶりを尋ねてみようと呼びかける。地方自治体からも見放された自分達の仲間を救おう！彼女達の子供を救おう！と。そして提案する、無料の幼稚園の建設を！働く仲間の黒人女性達が安心して働け、子供達が安全に教育を受けられる(可能なら無料の)幼稚園の建設こそ、テレルが声を大にして主張したかったことだ。「私達の家庭の雰囲気を浄化しましょう。家庭が幸せに楽しくなれば、それは金や銀よりも高価な遺産となるのですから。」と演説を結んでいる。

註

(1) Barbara Sicherman and Carol Hurd Green, ed., *Notable American Women:The Modern Period, A Biographical Dictionary*, (Cambridge, Mass. The Belknap Press of Harvard Univ. Press, 1980), p.678.; Terrell, *A Colored Woman*, pp.6-7.

(2) Terrell, *A Colored Woman*, pp.32-33.; Stering, *Black Foremothers*,pp.122-125.

(3) Terrell, *Ibid.*, pp.59-61, 63.; Stering, *Ibid.*, pp.127-128.

(4) Terrell,*Ibid.*, pp.83, 97-98.; Stering, *Ibid.*, p.129.; Sicherman and Green, ed., *op.cit.*, p.679.

(5) Stering, *Ibid.*, pp.130, 133.; Sicherman ed., *Ibid.*, p.679.

(6) メンフィス・リンチ事件の詳細及び黒人リンチに対するテレルの立場については、次を参照されたい。拙稿「反リンチ運動家アイダ・B・ウェルズ」立教大学史学会『史苑』第五一巻第一号、九一年一月、三一－三三頁。拙稿 "Black Women in American History: The Significance of The Turn of the 20th Century" 浦和短期大学紀要『浦和論叢』第七号、九一年九月、七〇頁。拙稿「シリーズ黒人女性その2黒人リンチに立ち向かった女達」*JAIG Report* (No.7, '92. 8, 日本グローバル協会) 八頁。

(7) Jones, *Quest for Equality*, pp.24-25.

(8) Terrell, *A Colored Woman*, p. 143. ; 一九六八年に出版されたこの自伝の序章でテレルは「白人女性ならば乗り越える障害はただ一つ、つまり女性であること。私には二つの障害がある、つまり性と人種の二つ。黒人男性ならばただ一つ、人種のみ」と書き出している。黒人女性研究において、必ず問題になる二重の抑圧についていずれにも偏らず、両者に対して正面から取り組んだ黒人女性の言葉を噛みしめたい。

(9) "NACW Department Announcement", *Woman's Era*, Aug.1896,3-4, Mary Church Terrell Papers,（以下 MCTP と略記）Container 43, Reel 30, Library of Congress.（以下 LC と略記）この史料は Jones, *Quest for Equality*, pp.131-132に採録されている。

(10) "Minutes of the NACW, 1897", "Programme", MCTP, Container 22, Reel 16, LC.

(11) 協会規約は議事草案に書かれている。加筆修正の結果、一九三五年当時の規約は前文と全十五条から成っていて次に収録されている。"Constitution", MCTP, Container 23, Reel 17, LC.

(12) "First Presidential Address to the NACW", Nashville,Tenn.,Sep.15, 1897, MCTP, Container 27, Reel 20, LC. also in MCTP, Box 102-5, Folder 127, Moorland Spingarn Collection.(MSC) この史料は出版されず手書き原稿のまま保存されていたが、A CARLSON PUBLISHING SERIES（一九九〇）刊行の際にJones, *Quest for Equality*, pp.133-138 に採録された。本稿では加筆推敲の跡のあるテレルの手書き原稿合計二十二枚を使用した。

(13) Jones, "Mary Church Terrell", *Journal of Negro History*, p.26.

五. おわりに

アンジェラ・デービスが引用した「共に向上しよう」の協会のモットー[1]は、テレルが初代会長演説でも繰り返し「自分達の仲間」「働く仲間の黒人女性達」と述べたように、協会の究極目的が黒人女性全体の向上にあることを簡潔に示している。全米黒人女性協会は一部の知識人に過ぎなかった女性達が、自らの人種に負わされた悪印象打破のために立ち上がった所産である。彼女達が常に見つめ続けたのは、「自己犠牲を強いられている何千という黒人女性達、南部の片隅で学ぶことからも祈ることからも離れた暮らしをしている多くの母達や少女達」（第三章）であり「都市部に住む黒人女性達の暮らしぶり」（第四章）であったのだ。十九世紀末において、合衆国に生きる女性同志でありながら白人女性達が追求した目的と黒人女性のそれが、自ずと異なってくるのはテレルの言葉通り二重の抑圧との闘いがあるからだ。白人女性達が一部の中産階級以上の女

性に焦点を当てた参政権運動や禁酒運動に代表される活動を行っていた時に、黒人女性知識人は自分達のための運動に留まることはできなかった。黒人であることで自分達の向上にも限界が設けられたためである。底辺からすべて向上することこそ彼女達の究極目的となったのである。

黒人女性史において、協会創設者達の活動は決して過去のことではなく、アンジェラ・デービスの言葉にあるように、現在の合衆国の黒人女性にこそ思い起こすことが必要な時かも知れない。「ひとりの人間として、一人前の女として」[2]行動することを語りかけた全米黒人女性協会創設者達は、現在の合衆国に生きる黒人女性達に再び語りかけることだろう。「結束して共に向上しよう」と。

註

(1) 正式には"Lifting as we climb"である。筆者は他稿の中で「私たちの向上による仲間の前進」と訳した。（拙稿"LIFTING AS WE CLIMB"『浦和論叢』第九号、八五頁の要旨、七〇頁にはシンボルマークの写真を掲載）

(2) 拙稿"Black Women"『浦和論叢』第七号、七二頁及び七六頁の要旨。

（浦和短期大学）